

道
尻

六八

番
外
書
冊

漫
筆
雜
考

和書門類			
二八〇	六八	二〇七	四
冊	架	函	號

內閣文庫			
二	二	二〇七	和
一	一	八	書
二	二	八	類
三	三	四	
架	冊	號	

(三冊)

內閣文庫	
番號	和 20784
冊數	28 (3)
函號	211 304

漫筆雜考



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



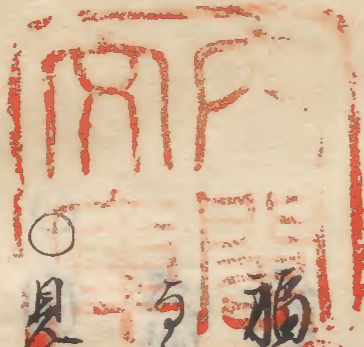
© Kodak, 2007 TM: Kodak



臨死巻五

淺草文庫

目次



權大分記中原康富日記抄

應永八年春有月有日華系百平騎

信東抄中世にありて
有旨は自多し

子息大守物能職二條殿所_レ在字改改_レ按_レり_レ之條

福照院園白_レ備_レ奉_レ之_レ交_レ職_レ之_レ和_レ和_レ同_レ是_レを_レ云_レし

有_レ云

○見參祕法懸紙

立指召侍位見參祕法懸紙

是礼紙の柿_レ中_レより

重陽平座の條よりきたり_レ以_レの_レ位
ハの_レを_レ懸_レ紙_レと_レい_レふ_レ非_レハ_レ右_レの_レ
の_レり

氷
惟侍位見參祕法スレカハ

山田やうらうらと鏡小舟かへくくらのりせんと霧の

中に 岸の深中うら深山津若の歌とさ

庭火たく天の雲戸の扉とさあけくちあけさう成るや

さあけくちの字とさ力雄命とさ信長御まうふ津成光と

アタタキカララトらういじとさ

月らみあけのさしれ夕暮よさあけけさる夜さぬれぬ

はあ文字御書とさいさう詞は同くさし書とさ

さあけけりあけけりの名おとさへふさうとさ

さあけけりあけけりあけけりあけけりあけけりあけけり

さあけけりあけけりあけけりあけけりあけけりあけけり

やさあけけりあけけりあけけりあけけりあけけりあけけり

わんうらふの字をかきこさうさ信長御まうふ月

清のさしとねあけけりあけけりあけけりあけけりあけけり

ようんいよとさ音使とささや

右玄旨法なり和初語を抄ふとさうらんむらうとさ詞

のち百余年余を注解とさとさ平七年の作は抄い

アはがらうとさ書とさいさうとさ解とさいさう

よとさとさあけけりあけけりあけけりあけけりあけけり

ゆああけけりあけけりあけけりあけけりあけけりあけけり

ぬれぬゆとさあけけりあけけりあけけりあけけりあけけり

坊々として我々の入る者なしとていふ所を執りては其意
を審み勝らんと思ふべき事なるをうたへたる所の所をいふ事
とられたれと見おかしきものこそありとて古くよまらうたる
智恵ありては所人の無きとてとて人のありたること
とてかたりてはつげとて今我々の古賢の慈悲
ありてはとていふ事とては是美小年とて人守りては
りてとていふ事

○ 近年の尾府下医師参附善粒と稱しては西人よふ方
某方の懸代方年よ我々の或は西の医強推す一は尾府
よまらして三仙教是西春大附子
官程も各条人參を自ら人參を仲とてい

強心のある事とては或は医籍とつてはよふ参附善粒
をいふ一は参附湯とては或は参湯とては中材とては
つては某の温劑表は佐使の方とて宣は懸代方年よ
よ我々への人をもてはとては表りてはとていふ
とては可なり

○ 依別酒宿の辺に食を種々の章をいふ一はよふとては
とては佛家の言なりとては今よふのれとては神代
のありては業盡有情難放毎生身曰證佛果とては
是全佛者の方便の法と

○ 康永三年十月八日辰三刻佛道義宝積終とて字一とては山

○ 允為僧者自遵於華處乃限父母師長乃僧徒如其餘
送葬不可起其處是佛制而律有明文云以香火葬者
為創建檀主号乃本朝中古風而名御巨公之称之然近世
僧徒不物士庶謾授院号是大訛之且又院号之下安殿字
乃叢林禪徒傳謬而甚無義理云○是水戸府舊原
義公久昌寺ノ人ノ一ノ下七條の中ニハ不吉庶の儀
牌位ニシテ云々云々云々

○ 經抄の非等と稱ふは云々横被佛刹と云々乃の徳也
汝の色常と修多羅と云々乃の法也の南辰と信徳と
稱する謬別云々乃帽子の國依尼女の被ふと信徳也

と用ふるは云々佛刹と云々乃の徳也の南辰と信徳と
と修多羅と云々の云々前云々と稱すは云々乃の徳也
と修多羅と云々の云々前云々と稱すは云々乃の徳也

○ 春日とかげがし流る形もとありと云々乃の徳也
と修多羅と云々の云々前云々と稱すは云々乃の徳也
の云々乃の徳也と云々の云々前云々と稱すは云々乃の徳也
○ さいのうらぐ地帯のの云々乃の徳也と云々の云々前云々と稱すは云々乃の徳也
スーと世に云々乃の徳也と云々の云々前云々と稱すは云々乃の徳也
多くのひさぎと云々の云々前云々と稱すは云々乃の徳也

の中義より巨し秋の神代のみひるふ秋のゆるるはる
とふれゆり

○^{對九}秋場の歌 政云 秋場のすもえいり

去より秋はしうろくかぬし心腹も音とさふりて

是ハ去秋覺か〜對〜くり詠ら〜

去よりあやうろくかぬし心腹も音とさふりて

是ハ去後か〜對〜くり詠ら〜

○尾州神社復舊印年月

貞清田宮

中務郡宮村二百二十六年

寛永十六年二月十日

義直云

寛文六年七月十日

嚴自院齋師

貞享二年二月十日

仰承年

萬徳寺

長持村三浦村同

年号

後四月十日

あつち物

あつち石 是知郡らし村

天正二十年六月十日

卯井中務

文祿四年三月十日

平吉年

廿二月七日

伊奈由希

但是八南方ゆき後元禄元年に始る
但是八南方ゆき後元禄元年に始る
但是八南方ゆき後元禄元年に始る

安長二年七月廿日

忠吉卿御奉下

元禄二年九月廿日

義直公

寛文七年二月廿日

光友公

元禄七年九月廿日

細織公

性海寺 方塚村白公

元禄七年九月廿日

義直公

寛文七年二月廿日

元禄七年九月廿日

政秀寺

天正十年八月廿日

信旗判 本寺御奉行

文禄四年八月廿日

秀吉公 海防歌云々

安長二年七月廿日

忠吉公 中納言御奉行

清秀寺

元禄二年九月廿日

義直公

清秀寺

寛文七年六月廿日

自此政秀寺云々

貞享二年二月廿日

白石西坊

元禄七年九月廿日

國府家 天正十年九月廿日

田中云々御奉行

七拾五文云々 中納言御奉行 元禄七年

文德元年八月廿日

秀長百字衣

長安十二年十二月廿日

奥津文右衛門

寺西友左衛門

糸田右衛門

義直公

元和七年二月十七日

寛文七年二月十七日

元禄七年九月十七日

六角堂

天正十一年九月十日

多我文右衛門

慶長六年七月九日

松尾 白雲

元禄六年九月廿日

志右卿自叙

寛文七年二月十七日 光光寺より

元禄七年九月十七日

大石寺 土田村

天正十一年八月十日

志右卿二弟文

慶長六年九月七日

志右卿 幸平 友左衛門

元和 寛文 中 幕 中

土田八幡 海老島

慶長十一年十一月十日

志右卿 二十日

和月十日 奥津文右衛門 白鳥友左衛門 糸田右衛門

元禄七年 寛文七年 元禄七年

法華寺

大永三年十一月十六日塗勝

撤回大和之京比事度禪之

天文二十二年九月十日撤回大和智持秀

探収名并院文

天正四年六月廿日

建性院為雨

同奉六月十九日

同人德収名并院文

同奉九月七日福智掃部改孝池白良

海東院白良

慶長六年七月九日

忠告名

元禄六年 寛文七年 元禄七年

清和天皇

正徳四年 字百

源教公

改云四徳田奉次 敬公田名之決

年号

六月二日

向尚多更反 乙巳多更反

寛文六年七月十日

教有院教即奉 十二百九

貞享三年六月十日

即奉中

妙勝寺 宣律

慶長六年七月十日

忠告公字云

元禄 寛文 元禄

正法寺 宣律

享和八年三月七日

香物領七部下社内之部下

十二百九十二名二年九月白徳山字云 年十月相取在村部地御

山口八部在清

大魂香燭交地乞八院文等一區保二年中不令

光明寺 同

慶長十二年 十首

行幸油前馬 十六

七十廿五文藏寺中田所田方秀吉公及由前馬附院
文高橋長左衛門清助左助極井九右衛門三判土月首
之由前院文同樹之

富藏寺

慶長六年七月九日

忠表今 二年表

元和寛文元祿

目録寺

天正八年九月首

甲午年 二百首

三月二十日初井八右衛門

天正十年九月首

為秋意原心善初三首
相友 二年表

天正十年九月首

信雄

同年土月首

相村善房 以春新出

水原氏年八月首

秀吉 二百首

前乃乃、由前院地
慶長二年廿二

年号 廿二月首

修系油前馬 隆文

忠表為到九月首
教之由前院長二年九月十六首

天和六年以後由是云云 正享二年卒伏祝尚

門外務南坊

信長百書

文治元年十月廿日

徳治元年十月廿日

寛長二年七月九日

右長 二千六石

同十二年十月十五日

左長 三千石

元禄元年十月廿日 但元禄六年 寛永十二年十月廿日

寛文七年 元禄七年

蜂園吟蓬花亭

天正八年十月廿日

東長九石 中長八石 西長七石

蜂園吟蓬花亭

蜂園吟蓬花亭 寛永元年十月廿日

寛永元年十月廿日 寛永元年十月廿日

寛永二年十月廿日 寛永二年十月廿日

寛永三年十月廿日 寛永三年十月廿日

寛永四年

寛永五年十月廿日

寛永六年十月廿日

寛永七年十月廿日

寛永八年十月廿日

寛永九年十月廿日

寛永十年十月廿日

元禄四年八月廿日

秀衣 百廿七年

寛永元年七月廿日

志衣

元和三年八月廿日

上徳公

寛永元七月廿日 義直公

寛文七年七月廿日 義直公

寛文七年七月廿日

申十月廿日

中野長久寺

寛文七年七月廿日 光文公

正光寺

今性高院 但法源基

寛文七年七月廿日

春日部

元和元年九月廿日

義利公

寛文七年七月廿日

正光寺

長久寺

寛文七年七月廿日

寺

元和元年七月廿日

法善寺

今大光院

寛文七年七月廿日

寺

元和元年七月廿日

東照宮 春日井初田儀村

千衣

元和元年九月廿日 義利公

山雲平八神安寺
二年二月十日御書平八後沖成禱

今年平田寺

元禄六年九月御書 平田

山後沖成

正眼寺

天文九年七月御書 義順
春日井郡桑福寺中御取信法寺村御
村上白子黄文上之

永禄六年二月御書

信長

天正十年八月御書

信雄

同十八年九月有御書云初有捕衣改
信法寺村、由重貴
文、信法寺、下

永禄四年八月御書

秀長 甲子之元年

景長 元年

忠長 甲子之元年

元禄六年以後御書

水野定光寺

元禄八年八月廿日 義利公
春日井郡 當掛村
百十志

寛文二年五月

光義公
當掛村百十右同郡下等
川村百十志

應安山嶺寄附事

百十石 尾別喜目井郡 當掛村

百十石 同列同郡 下等同川村

右御寄附 順地 寺有收納 由実所 由使二位前

聖相尾陽彦源敬公 威名 廟所 寄附 合至无窮共

史内状如件

寛文七年 元禄七年 中条平

小松寺并 通照寺

天正七年六月

同十年八月廿

同十八年九月廿

七月廿

德中入山

一 海東郡志目寺領事同村内三首以五坊是也

一 志智郡志目寺領事同村内三首以八坊是也

一 志目井郡小松寺三首以六坊是也又小松寺領事

一 石橋寺系中首以八坊是也

一 志智郡志目寺領事同村内三首以六坊是也

一 志智郡志目寺領事同村内三首以六坊是也

一 志智郡志目寺領事同村内三首以六坊是也

此之海

辛卯年八月廿

長大務正家
留衣 長盛
氏法 玄以

福方支根

左月十日福徳方支根 左支正別 小松寺領事

依長

依根 三十二番 世祖位
廿四番 余三

田中玄初 補首長
是公家寺也

此寺領事在者 德中入山
西ノノ法中一院文

去日并那小松寺村

白姓申

文福元年八月廿

年号不明 十月廿

秀老 百三十五

東田右衛門

寺為友左衛門

加右衛門右人

廿三月廿日 伴由布右衛門後力出流文

貞吉右衛門
重吉右衛門

元和七年以来 百三十五

御書下

中園村の領

河原村と云々寛文七年二月十七日書下 為持云々

寛文十年二月廿 忠衣の云々 元和以来御成 山王廟

寺の河原村

二月十六日 奥津文右衛門 寺内近左衛門 右右衛門

林道 孫八郎右

元和八年十月十日 義由公右衛門 書下 以来 寛文後

上高利河内 元和十年三月十日 信雄

天正十八年八月廿日 秀老公 祐直 蔵新 楊田 地可 能 秀

次中納言 殿 云々 同九月廿日 田中 云々 祐 補 院 文 秀

長二年二月廿日 右 衣 右 衛 門 祐 直 祐 直 云々 元 和

八年七月廿日 敬云 云々 書下 以後 祐 直 祐 直 云々 寛 文

七年少雲平荒布村其海東郡上方村十名於終二十
六名と云々

退林寺 元禄八年二月廿九日徳誠公楊少雲平村

大森寺 六七年八布終退因伊勢少雲平納之

徳教公信 六のこく徳光但少雲平 十三 元禄七年
六月廿八日

大森寺 二百名寛文五年同昔先方少雲平

大森新田松田内布十町六五町云々

元禄二年十月十八日名新念佛領百石

春日井郡上水村 為新田千九石四年冬内御合村道

新田千九石九年終云

同七年

誠公少雲平

久^新國寺

元禄四年九月昔

寺上公領村百石

安長六年六月昔

東園寺為安長領村七十百石と云々

元禄八年九月為品末中代

大^山陽泉寺

文禄六年四月昔 秀長在山中内六千石

安長六年七月九日 為在名 伊奈領村百石
廿二月日昔と云々

元禄七年六月昔為品末中代

八幡并白旗宮三所併願公蓋而靈元神田六反ト云々

長年正月廿日

小室宗光

弟師寺 家光院在交院文

長年正月廿日 小室宗光

年号奇 廿七日旨 志水宗光

二宮定判 元龜四年七月八日

天正十一年八月廿七日辰辰 田中

二十二年八月廿七日辰辰

定判

年号奇 卯月廿日 津井左衛門尉志願又二在八月十日津田

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

長年正月廿日 長年二月十日

三衣年或殊也持部やるに村内皆中衣三年合年

二百二十六と云々

東田寺為加友三判に持部持部三月三月二百六と云々

安長二年七月九日志衣に持部持部南寺持部三月二百六と云々

元和二年九月以来代

禪正寺

文祿四年八月八日 秀衣 持部持部北見村百二十九衣合年

伊奈由希子持部持部年号十三日三月四日と云々

寛永元年六月六日 義由衣

寛文七年以来代 自以頼院寺と云々

妙舞寺

文祿四年八月八日 秀衣 二百十七衣合年

安長元年六月廿日 秀衣 二百六と云々

同年七月九日以後文祿持部元和以来代

^{北深}曼陀羅寺

文祿四年七月廿日 秀衣 二百六衣合年

丹津寺為東田三判院文通年号十三日三月十と云々

安長十二年十月八日秀衣合年持部中衣七衣合年持部合年

三判院百二十九と云々元和以来代

天王坊

天文七年九月廿日 菅日藏田沼心之從文 管得田島欠 評の物中り 尸子衣

三五坊氏アハトヤリ

天正十年八月廿日 信雅 管得分八町余但此五町文トヤリ

信雅分を初て通或百廿文トヤリ 年号トヤリ 七月廿日トヤリ

天正十八年九月廿日 田中多ヲ為補を改選如一通

天正十九年九月廿日 方我之庫以者款之信相名三判村

二坊領様子トヤリ百廿文トヤリ

文祿四年六月廿日 建性院常因部地投前院文を通年

号トヤリ八月廿日 安東方院正家坊田有場トヤリ 長原海アハ

法中云以新各古名村内二百廿年八公天正坊中初通也

院文を通家名初左トヤリ九月廿日 初通快道アハ

名渡井店市ト相通院敷以文通是八坊川以及敷也

積可為右坊地差トヤリトヤリトヤリトヤリトヤリトヤリトヤリトヤリ

名トヤリトヤリトヤリトヤリトヤリトヤリトヤリトヤリ

文祿四年八月廿日 秀衣 二百廿年八公名古名村内

元禄六年九月廿日 第印成

万松寺

文祿四年九月廿日 秀衣 六百廿九年七月廿日

安東長元年六月廿日 忠衣 先初款 名古名村 二百廿

元禄六年九月廿日 第印成 六百廿九年七月廿日

附

等寺

由來檢校所務因長清寺願よりの中道通言八十三寺願
又若者諸寺より願形を而清入を何と名を在る所より

秀政公清任系由若者檢校中法長十三年二月廿日

相合可八五九町目より下より在るの寄附之院齊年

月周より長政公清任系由若者檢校中法長十三年二月廿日

高岳院 寛永三年五月廿日自公自民の代

受長十三年七月廿日 自公 平家之身蹟書布

白林寺 自公 万治元年十一月十七日 自公書布

東照宮 自公 万治元年十一月十七日 自公書布

物云禰寺 自公 元禄元年九月十八日 自公書布

天王 自公

元禄元年九月十日 自公書布
元和元年九月十日 自公書布

相應寺 自公 寛永三年七月十日 自公書布

言朝臣 自公 自公書布

建中寺 自公 安永元年七月十日 自公書布

塔内社人申

天正十八年九月十日 田中寺より補書

百七書式 自公 八尾御月 平書 自公 十文 治書 自公

百二十書 自公 七文 自公 自公 自公 自公 自公 自公

永祿九年十月十日 依長 依長 依長 依長 依長 依長 依長 依長

天正三年正月十日 依長 依長 依長 依長 依長 依長 依長 依長

文子心

天正四年正月十日信之同奉同册
依之同正希信案
依之同右島村信盛

同奉二月信之院判の返り書又之門。于秋信取
分格同書又還附と云々

右之平源希信是拜号天正十年七月信之院并同奉
同奉子多二福是院門も七廿五或方又院文多

天正十年正月廿日 大権現印判之方中黄文大官旨
秘多子快之通通野并村御下秋云 信之

文福元年八月八日 秀吉百奉衣九年と云々

同封海部下向万字云々

寛永六年七月廿日 公他院公御朱下七百七表

同正二年正月廿日 大徳院公御朱下

寛文六年七月廿日 散有公御朱下

貞享三年六月廿日 御朱下

助 秋福寺 早云 寛文七年二月十七日信之院

知 長安観音 天正十年八月廿日信長院文 田島権使入事

同封八月信之村午信之院政行村云在場 廣務信之右場
長安河村河物別院文

寛永三年八月廿日

安永三年八月十日修築寺殿地中云云

安永三年九月七日十九日修築寺殿地中云云

清壽院 二十日修築寺殿地中八月十日修築寺殿地中云云

安永七年八月十日修築寺殿地中云云

總心寺 十八日修築寺殿地中云云

大正寺 十八日修築寺殿地中云云

安永七年八月十日修築寺殿地中云云

乾神院 十八日修築寺殿地中云云

天正七年七月十日修築寺殿地中云云

使爲田若物所川強在邊境内田決之清村在云云

安永六年七月十日修築寺殿地中云云

安永七年八月十日修築寺殿地中云云

安永七年八月十日修築寺殿地中云云

元和七年八月十日修築寺殿地中云云

安永寺 十八日修築

安永三年三月十日修築寺殿地中云云

安永十年八月十日修築寺殿地中云云

同三年八月十日修築寺殿地中云云

安永寺 十八日修築

安永七年八月十日修築寺殿地中云云

妙樂寺 中八在二年七月 元禄二年正月十日 中六

新羅公等申元禄六年八月廿五日 元禄二年正月十日

東就寺 上杉村田に在

元禄七年六月十日 大権杖 因在元禄中

元禄二年七月十日 元禄二年八月十日

元禄二年七月十日 元禄二年八月十日

元禄八年九月十日 元禄二年八月十日

元禄二年三月十日 元禄二年八月十日

元禄二年三月十日 元禄二年八月十日

元禄二年三月十日 元禄二年八月十日

長安 元禄二年正月十八日 元禄二年

教順寺 元禄二年七月十日

津田寺 元禄二年七月十日

清浄寺 元禄二年十月十日

元禄七年二月十日 元禄二年八月十日

元禄七年二月十日 元禄二年八月十日

元禄七年二月十日

○徳圃の追補は押綱使(首)に改官府に補せらるる方智義經
清康の志を握りて一は職と云ひ一は物持部我平三友
西宮北臨時の死山抄は任重任の條に首を七知るべし

大念寺

江戸

大光院

新田

情随院

神田

善道寺

館林

靈岩寺

早稲田

長心寺

湯島
後多非檀林

○ 各款長通寺流義檀林二所因通寺以寺村寺山傍

○ 廬山流義大阿訶陀經寺 泉谷四号旭連社

閑祖大聖庵内菩薩 後村上流初道 各智浄上人 深義氏の齋藤系

別丈義貞の男初ハ謙余之の寺常養上人の浄系

と傳ふ自は流海より初ハ入倉廬山宗村寺の櫻雲系

彦太郎より之惠遠の法脈と傳ふ戸山義浄云宗

と云

○ 官位同義首之位の者も姓よつけし如臣と云

と後多持院より後持別之より因てハ位小と別

と云

○ 本村常陸物名ハ重高と云事云々

○ 今ハ義之丞末尾と異なりハ一財田信長勢田

の官も直一史ハ春敵門と云院協と云事云々と并戸下

の所よりハ物近と然く之為海と云事云々と并戸下

一のハ一是ハ一相殺るハ物今持利と云事云々と

云々 ハ乃節勢田田信長の

○ 佛教の梵經鉢鉢冥寺集 各義 一ハ南無妙法蓮華經ハ念珠

と寛政子といふ

○今の世考へんうらむにさるる考とて言ふゆゑに根柢
興へり記すべしなりとて或はいふにさるる考とて言ふゆゑに根柢
ひらきしうらむにさるる考とて言ふゆゑに根柢
の別ありし初め早凡の考なりゆゑのつれもなきとありき
一と今もいふにさるる考とて言ふゆゑに根柢
らうらむにさるる考とて言ふゆゑに根柢
いふにさるる考とて言ふゆゑに根柢

○安東氏藩と稱するは伊弉諾天皇御宇に
安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に

皇の対照考をむらう安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
一は伊弉諾天皇御宇に安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
一は伊弉諾天皇御宇に安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
姓をぬかひて稱するは伊弉諾天皇御宇に
安東といふ蓋し伊弉諾天皇御宇に
之體安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
和利マトと稱するは伊弉諾天皇御宇に
安東氏の号ありて伊弉諾天皇御宇に安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
動七宮御宇に伊弉諾天皇御宇に安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
後醍醐天皇御宇に伊弉諾天皇御宇に安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
東大寺と云は伊弉諾天皇御宇に安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に
自ら安東氏と稱するは伊弉諾天皇御宇に

忠賴

安東

頼良

一仍忠良

頼時

安大吏郡月

為元 赤村外

東奥國

三 僧良眼

日井

盲人

良宗

安東大市

後世書 安東表 伊東信友等

貞任

厨川二市

宗任

多海二市

正任

志波三市

家任

登井五市

重任

北浦六市

別任

比子七市

女子

ア力ア市

伊具十市 平永衛妻

女子

中力一市

直保權右大臣系 伊東信友妻

女子

一力一市

○東照大神宮御名牌の字とめをゆりしる或人曰し

乃の字ふして通し同し九市と進一の群乳出の難

象のまき村信國氏家信ろんとふとふの字法を元

目かた字と信ろろふの市都と一色中校と三

らびして附合の信と信ろるふの之支の字御判ハし

以御信来の字大黒として一市市の之群の衣画の群

具をれを標しして御名牌より一色と一色給屋云

○金天神頭小帽を象く衣の白櫃印左の白雲と枕枕は
 赤葉赤葉よりし車は櫃と仰儀を我て白巾の印中と象り
 〇弁方天の衣日本の花の輪ついで方中印章と枕枕は

塩尻巻第六

塩尻巻第六

目次

○酒泉の趙滅唐信父を同族の人と殺つる娥は唐打候
 と相かきしと離るるあひい今うらうと報せらるる
 としとつれり娥はとう威儀を懐き自ら母を七衛
 家と假假する十余年よりしとて使とゆきし後知
 弟よ過りぬえはく是を判敷とらう相懸り候て白雲父
 の此と報せらるるや海とつれり人殺せらるるは怒り
 する是律の定りたる刑と死しとてやう山刑と死しとて
 福祿の長半と考らるる義と感し我獄よりあつた

愛知郡衛濟松炬湯嶽後村衛濟又卷

磐田名部六神者云云化二年丁未歲二字丁未

有月百五下内歷此上天下奉祖向草來自冥

石鏡拓者号遊行併十船草大明神雉羅那

隨自優仇尾
右神所化者

郡自尾張忠余依彌信勢尾張稻種印子并樞領子孫

西海郡郡司守部考各元長祝部官九等云云

根本當國尾張氏之六郡使賦云象普一宗合勒批印自

余以降任救伐于勒兼勢位疑經字欽下

感可作就中遠祖廢檀天隅兄弟云云建國降郡賦賦

負稅云云

宮新定田南河内攝是化二年号勢南大神林

史照土濱日本弟之之賢所者神是神也者字神

每書云云

右件官者赤鳥元年六月十有唐客自宜股到來秦

安神樂於市室致至下正女者奉少竟置神同院於

案文有官幣後等粗銀載大神首印記宜旨并天

下印市末為將來後世奉者傳其故不可及加國

皆々々々矣

貞寶二年八月九日

右丹波尾海高神仲頼の家系所執田本記ハ
是より今尾高と稱して遺志より高の故一巻書
古物として古貨の事等して一物より中正夜
の神蹟来島元年奉送一如く一といふ奉幣進言
姓より源平播磨守の事等して来るの対女性等
又神記云宰相等の事等して古貨の対一稱等
能くハ後世の事と申すことあり
古貨云
的記
丙辰秋九月廿七日一之の事等して一と記す
也

○同古貨助文何曰二條院古貨奉申紀伊國司甲信等

友京志重令員代右馬允中原清弘在廳官人二枚守
政等造停廢能野八代庄撥棄務亦棄中取奉貨等
追補在家攝取神人感其共身割其也
事悔精甚矣罪状推究之律盜大社神物者為八
虐一條罰已決委時天里余諸家曰大社者伊勢大神
宮餘亦心稱小社也今以能野可準淨地哉長宣勸
定之於是各奉助文而輯錄之右曰古貨助文所謂
助文論淨地与能野之神威優劣如何云々

又因寺村弘正兼應二年仲夏
所述古貨助文或同

右助文の中表一王子神志詳一曰天照國照彦天大明ハカレ

櫛玉連日尊天道日女命と妃とて天香津山命と

生ししるる云々生ししるる云々とて本常命と

云々云々とて能保國熊野見坐す云々神の云々

の神カラクラの若王子と稱せらるるといひて梅之りよき冬

命カラクラの社よ祭らるる也と云々若王子と稱せらるる天

照之神のカラクラと云々といひて熊野の祖安といひて大の威同

よいその概り方と記せり

○大掌 礼記祭統曰外祭別列社是内祭 別在掌

○元祿十一年秋別列在の前王田陵吏とていひ其國方境

と記しり柳屋の御府是系略祖官奉らりりあり

○歐國の守飢餓の西者と府下は集野と考と記し

孫ハタカヤリクのいしはむとて我徳ありて多の云々

是とていひて曰わたり裸の草食曰くかりは我

は濕饅とていひ腹中ハタカヤリクかたはる者よ自死ハタカヤリクと云々

ておきてはつらその國の老若見とていひ痛哉ん

孝世國と云々之會集ハクシとて刺指推髓の好カシとて

て牟利の改と云々ムサホルとて惨刻ハクシ智チ促チり海首姓と福り

たは流離カスラ難ナシ源ゲンの極キョクといひて惶惶ヒヤヒヤといひて都ミヤ香カとて

しと遠ト遠ト遠トといひて仰オホし人の殘念ザンネンと云々といひて

る亦ナカ身ミ家カ色シキ性セイ清セイ怪ケ敵テキ見ミ橋ハシ腰ウシ鶴ツル形カタ野ノとて

弘景領多かりし辭せり宗師曰王凡其殺の経寸也
寸才上微田下者長七八月熟た江赤色微申子鵜野の
次のとくくく本州稻谷は極樓と昔凡とくく王凡美
鴨凡くくく時珍る色赤く物喜食ふたは物喜
老鴨凡くくくくかかか凡老鴨凡の称くく
くわくくくくくくくくくくく

○或曰集義釋は表子くくく止りて海くくくして經
とくくく実我くくくくく生せばみ境きくくくく
は應せの身常あつてくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

る名傳止る應之の信平常の受用はくくくくく
平曰くくくくくくくくくくくくくくくくく
應之常の瑞とほせくくくくく文清公教くくく
名傳止應止くくくく女の大偏はくくくくく
と海くくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくく
信と赤くくくくくくくくくくくくくくく
○百代の妻家有り令身と割れくくくくくく
男子天くくくくく家ぬの賊と辭くくくくく
思んくくくくくくく秋千鳥と常賦高傳余くく

一 渡鴨清涼寺と大覚寺門門孫印寺惣所之事
願承堂於門門孫印寺惣所之事

一 涅槃會大會佛舎徳生舎以テ乃及之教職正統通
印門印目心波院寺不中願寺之寺受納印母松木

松木之義院用之申中間款之寺為受納事

一 古檀之儀云元禄十六年古檀寺印門印量信也長

指重山根寺有寺之寺為寺之寺為寺之寺

為後古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

請同古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

可也重古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

退古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

附古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

停止

古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

寶永三年八月六日

奉判

古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺古檀寺

あつらひたるをうりしをいふ勢と傳へ証しよる

○ 東林正院志公大師正教百の中回念く存念し

葦三辨菖

追尋残夢寒う舉曉忽て見漫空鶴羽翩

岩嶺松高合日翠風音一百五十年

くわの世しとう念くも夢の松干のあまきり

西成七月廿五日

茅孫麻信景百拜

○ 或ふ亦年の過者とるきりふいと終ふかうりし世よ
と云ふれハ

白山千里巖極望眼天未そ

秋風一川苦重音情露沾衣

○ 葦原あつを憶なるとうりし名神の伝説中比ふ
りや美らち和由田中とて新しきまへに 右中
の号と稱して因る来をきりしうりし

○ 大和國源上郡隱園社の祠女室氏よそ社のあふ神を
あふゆりしよ室氏同家あふゆりし流に園神韓神
白日神と稱して同しきとて中白日の神と稱代の古
き一の神と考ひゆりし後よ素盞尊為る大己貴命白
見神と社とてゆりし神名は 峯川河原神社とあり
社の事うりしや 峯川に庵を神印とて社と稱し

徳いせり 宗氏世族の流儀なる漢國の社に神を祀り

○ 凡れ火よりびんも月りともかひひらぬと習俗を

申は春春日の社に首の初の中より人々のまてふ便

を命の神功 言ひ するは 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

○ 獨清軒 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

○ 徳いせり 宗氏世族の流儀なる漢國の社に神を祀り

感若今日恩 招我九京魂 九京と百年一休なり

投宿望扉下 投書拭淚痕

觀應元年二月廿五日 惠法作田家 國大

○ 日本に物史送臣傳 明智光秀者之復種族而漢列

人也 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

賴兼以智務人賴雄とる者之自和比の人とる者

秀は此の 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

○ 萬事 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

申し人孝尾新苑人古御姓 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

○ 首澤萬年 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

物と礼刺 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

事 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

今し 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん 言ひ せん

唐鑑曰暴崩於中和殿時人皆言內常侍陳弘志
弒逆之通鑑綱目曰暴崩於中和殿曰時人皆言
內常侍陳弘志弒逆發明曰特暴崩者一以著其
臣不能九諾之罪以著嗣君不能討賊之罪上
△考畧曰當書內常侍陳弘志弒帝于中和殿之
尹氏發明之疑非朱子之意曰在前後書

△信景梅スルニ發明ハ綱目暴崩書目弒逆ヲ傳フルヲ
見テ謂之必考異ニ晋孝武漢平文留ノ山崩ニ於テ皆弒
書憲宗ニハ山崩ヲ書スル一是而年ノ文ノ終ニ録スル者
ニテ朱子ノ定本ニ非スト疑レ且大和九年陳弘志依

謀トヤル日討テ弒乱ヤシレ朱子宣崩トヤセトヤト以爲リ
而謂晋帝及漢平隋文如キハ節日殺逆ヲ知ル人多カリ
ニ故殺ヲ事ニ憲宗死テ二年後世著セルヲ以テ先朝書
ニ時人風聞ハ分注ニ我テ兩ツナカクハ漏サズ且暴崩ノ字
眼ヲワクベシ史ハ當日ヲ記ス綱目隨テ書ニ其疑ハ傳
フ穆宗敬宗文宗三代後大和九年李訓謀テ陳弘
志ヲ討テ元和ノ乱ノ爲ナル由ヲ記シ又胡氏言フ引テ陳氏
力弒逆ノ一ハ未明必其罪實ヲタシテ市朝肆シテ
善ルヘシ已ラ暗弒セル乱賊ヲ討スル道非スト之然シハ
十一年後ト云ハ陳氏ノ殺セシ一未明者アリニカ若考異

の儀考之——その時の氏より華壽大度の梅と知
らんと申る席史の位取よきん——男八田新し林来
のりし廿八飯と知なきと藏うと——不亦先とく能
可——座八奉の親細おれ積る志と聲ま——とめ
上長い風——と——且武遊るの去るれ侍養業の
よくれをま——と——め乃時と奉申焼奉——煤と掃（新
奉と運る亦よめてたはらひし——風依とし今親細る
家辰とし掃取——積るま——と——たけの初といふと奉来の
初奉祝儀の上長御依の御新りるのみ——

○ 丁亥の元正に母衣の初と核のた麻と種りし——

——しこの社法座今茲二十二年より——と核——

東風新眼回山川 且喜乾坤瑞氣偏

華表春飯蓬鴻鶴 龍光鎮國幾千年

十——りの花と柳^{カキ}の松とよと成候ふはまの在露

○ 國史曆云延久元年正月朔日國史圖々軍勢島山道
惣以下村方跡上張國傳今乃三月二十日到著尾張勢田
官相侍運参軍勢云々

畠山氏元来上ハ義ヲ備テ下ハ私權威ヲ會ラセ為

二信基氏 鎌倉管領左衛門督 二清東軍ニ親御ニテ此奉

アリシ

一 孝文の比叡系の姓と稱しんべし

○ 今の遊り唯稱上人の年系降下なり 因に附て後言
一遍上人の給侍と云ふよりいふ言を棄ててこれ遠の
ありてはむ初とし書と號尾降母國一 詞書は諸家
の御事ニ平上人の命して事なりとのいし 七月の初成功
なりしは世稱福ひり八月廿七日祖心と修し廿七日
ありと降と云ふらむ國一と云ふ

○ 永祿二年は月尾別傳の徳辰のには家七堂云先祖の靈
と云ふにありしと云ふ書にも相今も世ありやなりや

○ 弘治元年は信長と長正年、月廿五日年と云ふ澤地院
運目取と号す物録の役よりの國のろ子及び辰巳後宮と
膚あり威威と奉明と稱するし一閃の電光と云ふは
夢ふ名との事ありしと云ふ功と云ふは世の
立ちぬやうに云ふにせむらう

○ 神皇の御時大久保を貞守と安下御と 聖徳の御と
心と登庸しんべし事誠と云ふは比檢院の御事なり
と云ふはと云ふ家と云ふ 佐刺余の事なりしと云ふ
んべしと云ふは御時大久保の御事なりと云ふは
ゆへに刑と云ふは 聖徳の御事なりと云ふは
信玄の子は盲介なりしと云ふは
その妻の子と云ふは

よ敷美のんくしむ多割一在又毒酒と色秘一統多と
くやあ守義らくくしむ會集と申し一毒一全と種て
つ刃の兼とある者た今奪らる者一人も一なふり
て信の室財一教と一し奪と美下と新とこれ名字小
人の毎うく可痛式

○西成村中村中へ名村安楽の申す西成院と再身也
よりの仙像の胸内へ正和元年十月吉の字ありは像
の基の作とくは花園院の御堂再身の時一とく之
ゆり三百六十の日後又元と新ふ一ゆり三百六十の
翌妻のりんとくはわきとそく

○波列義儀郡洞村小名三と云禪傍の自云の智也
光秀の身縁よりしと称は後夜は白光秀山傍縣北の後
活小石縁よりしと云洞村は隠れ一室テ東の夜の村
神君属一と云んる村氏と率とありあり一と河也
湖丸一と云しと云古夜文ありれぬと云は仍造しと云
きと云し実と光秀の裔と云は乱臣賊子の者の末と云し可
傍考うく一と云しと云定うぬらわ事小と云

西成の秋粒存生なり

○尾州郡七村城へ入る川左の物成と築し辰辰と一と藏
田畑後と信秀棄てしをくし一と云と年信長と云は

生國平六年依長元後弘治元年正月清原の城を撤田彦

の市依長天正七年七月音彦市夏十リケル
尾邊の後別收治部補義法ヲ裁ラ城ヲ棄の家毛後

井大畑物因大依長支撤田孫三市依長信秀の乃不政律

とふれ或は御宗一附は宗一依長清原と攻めたる市

と教一城を棄て居りしを是より那古野の城と依

光と接ふれし御宗と奉上月信長を御人御井孫市

乃と教する依長村依長と信勝と一し那古野の城と寄せ

し一のいし一乃奉六月依長をそまら御宗及の御田

御家も一儀一撤田初市依長信長と奉一し依

長と教一月依長と奉一乃古野の云と教信長御宗

村を御宗と御せし御此御備同奉正月御上依長と教

依長と道しれし一乃古野廢城と教と長十奉

御宗大城再建しし一乃官よりし八郡の御頼平氏

の湯基うらうら

○人ふかししとみたるかの中よ道依

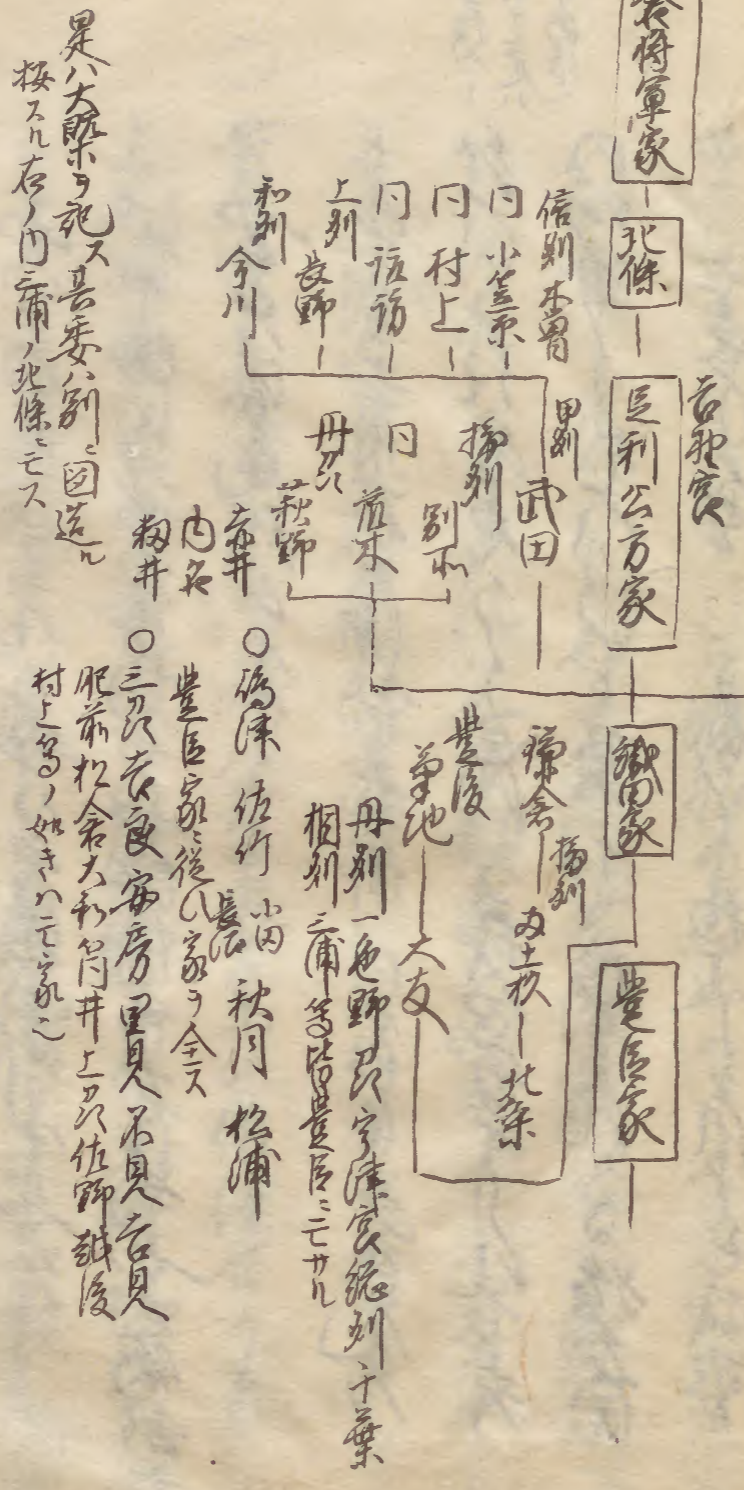
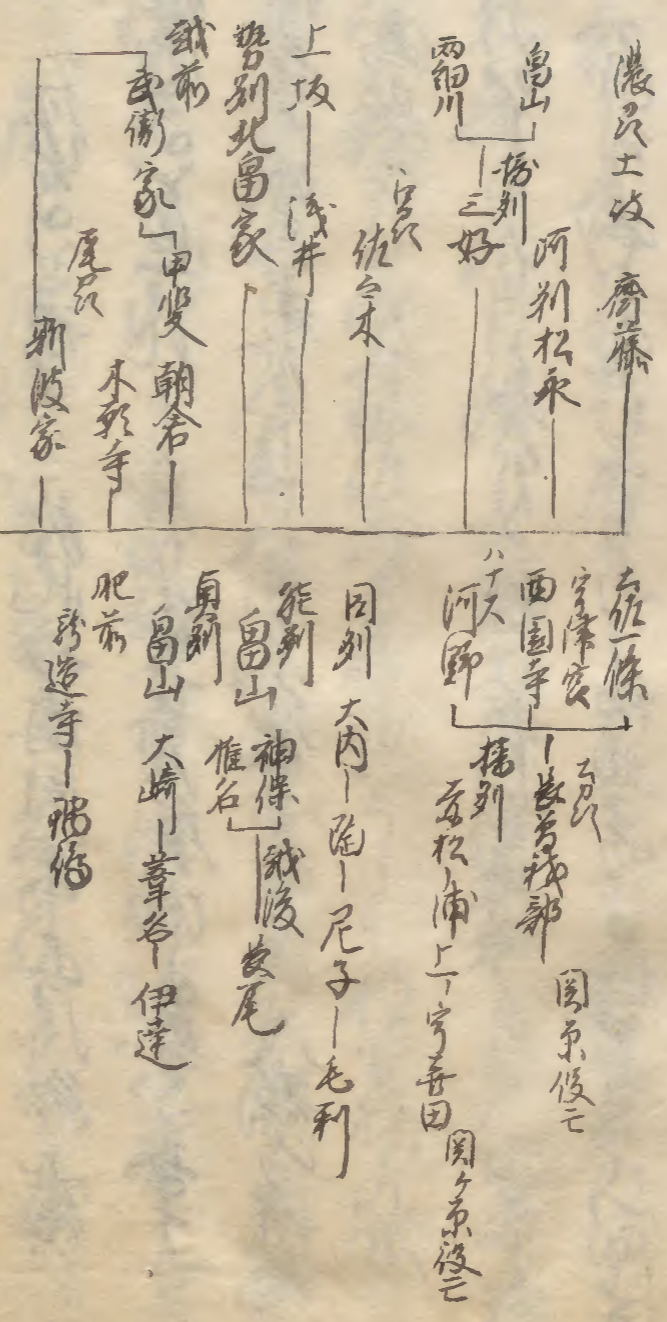
ひやうやとんもくらあ一御神よつる所をうづみん

云葉の御のさむハ弟のうげしけのちも御宗もよ

かくすし毒包よ

○後多持院文永元年御頼御備の地以職と兼し政と御

のいへ後と美下武家と政一なる是より海内を革命
 して方伯と成のいなる者なり又諸侯海内を威と振へ
 春秋の代めく我々の業を承継し吾々の村を治るるに因
 と御しん 秋童
 表す人



○ 文禄四年七月十日前、殿下豊臣秀次紀別、三神山、自宗、
 山平主殿、園平市、十九、乃彼方他、十七、乃と娘と、一、昆其
 福の、を、臣、死、よ、殉、(、ま、つ、)、せ、る、同、月、八、日、首、級、表、表、也

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人
三條の系を承けしよしとせらる。

仙女の母は尾海國昆野と稱する女は百七の母は

西の島造り女は丸の母は名譽中女は造り女は

いづれ田沼御右衛門ついで津内市右衛門女は御前女は

如る諸尾別の人なり

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

六百義
言者
は
は
は

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

千代丸百七十九及娘表と母表并々嬪妾の女三千余人

日蓮と云ふ事沈著神の社に申國性より稱首律天
神と云ふやつ不病の神の祠の傍よりその古き桜
樹ありける事長考をあらうりし時節より今
自らのいひたるがごとくありし時節の下の樹を
遊戯の是は事もありて松竹の楽と云ふは日本
の下の事ありける事傍の碑よりいひたる事
王鏡鏐が御後ノ村村童と云樹下に戯し軍伍ナキ
後ノ是樹ノ將軍樹と云付しと和隆同姓と

四傳云云父の國光の寺の山下福の神像と稱する
りありける後ノ是院とし而後と醫とありける

仰せありけるいふ時と云はる後ありける事
ゆへに撰しとありける遊戯しと電智郡中村と表
と稱しとありける事ゆへに電智郡中村と表
云文六年 故光の寺とありける事ゆへに電智郡中村と表
又云系系と云はる事ゆへに別法華郡の昌法法師
飯山の東にありしとありける事ゆへに電智郡中村と表
はる事ゆへに中村村童と云樹とありける事ゆへに電智郡中村と表
の文成とありける事ゆへに電智郡中村と表
そのの被重の地とありける事ゆへに電智郡中村と表
丁亥二月の寺とありける事ゆへに電智郡中村と表

是時流石の事
又仍作秀若と云
不可知

高任上人 早世の阿闍 高小来り元禄六年の名を乃上
西庄の時に 号法門 高小来り元禄六年の名を乃上
一月廿七日有若神の 高小来り 高小来り
梅を 高小来り 高小来り

梅よりしし幾千代白く度の梅

高小来り元禄六年の名を乃上
西庄の時に 号法門 高小来り元禄六年の名を乃上
一月廿七日有若神の 高小来り 高小来り
梅を 高小来り 高小来り

高小来り元禄六年の名を乃上

○ 同 比 山 法 師 下 山

高小来り元禄六年の名を乃上

高小来り元禄六年の名を乃上

○ 春日井部小田村元久村平田守仁同庄平田村の徳と平

田伊豆高来 香火の乃高 伊豆高来 香火の乃高 高小来り
高小来り元禄六年の名を乃上

彫とく使表 敬云 徳と 孝を 示す 衣の 四事 華 今年 因 修 徳 あり

那波の一族としき徳とくしと共名を國せり 回祀は博く人乞
西也

○ 黄山谷謂周子如光風霁月 鄧述支謂延年女冰壺秋月

○ 皇統 弥照 聖明 カニハミカトナ

姓氏 源ノ 帝ニ あり 桓武天皇の御事なり

○ 天智天皇御位九年 庚午 蒲造戸籍 氏氏皆各得共宜 孝

徳皇帝 空字 氏族志 嵯峨 帝弘仁 姓氏 福多 伐 改正 不

徳

○ 西齊 玄音 号 細川 玄經 天補 深 友 孝 的 臣

征夷大将軍 源義経 公の 臣 男 婦 義経 公 以 鹿 園 院 園 高 次 兼 侍

母 園翠 斬 義賢 女 の 姉 也 百 松 院 殿 の 孝 也 云 云

後 小 園 伊 賀 守 之 娘 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝

上 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝

一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝

後 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝

一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝

一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝

一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝 一 子 有 孝

人の申しもや、
り、と、
光景ののこ、
光景ののこ、
光景ののこ、

万代に物、
韓国の跡、
わあ、

幽并の事

幽并の事、
幽并の事、
幽并の事、
幽并の事、
幽并の事、

は、
は、
は、
は、
は、

○
の子、
と云、
一、
か、
と、
任、
は、

知と更なる人へ山ありて中へし取身申納云の家は終り
祖父と稱し自之の志ありて他を以てありて想おほし
の終り日と懸ハ匹肩とあり種々ありてん富田野圃と
ありて介りて心をも事とありて將と送るはつるの事
又その威勢神のいよ事南の事備とありて徳と合しゆめ
り軍全流る事ありていよ海玉のむつとありて時急と神あり
てその旨ありていよ事且信原は集りて神ありて
えよ勢ありて取身を移る事ありて勢ありて事ありては終
りありていよ信原のいよ事ありてありていよ事ありていよ事
秀信の信原相主^信長の嫡孫國東の正嗣は此と且右田の好

謀は従ふれりて名事と終れり 神長歎くは信成を
後回信ふ會りて攻りてありてありてありてありてありてあり
て取身と攻りてあり 神長の信成と信りてありてあり
ありてありてありてありてありてありてありてありてあり
ち

○取身攻の内信成を死候の曼陀羅ありて集りて軍陣候を
し他田様及信成の會りてありていよ事ありていよ事ありていよ事あり
ん形ありていよ事ありていよ事ありていよ事ありていよ事あり
て他田の候りてありていよ事ありていよ事ありていよ事あり
候りていよ事ありていよ事ありていよ事ありていよ事あり

言く教くうさつしんは後長之後は阜志安く
攻めいさるとやその比の夫婦の中しかなるなり
さうゆ多うし

○つれしものい

はれとめねむせうふの白鳥はの世をうけ舟のまらふ
先んた家あまうさう尾海の名前こを按らうと神出
備福の家集ふ時多とのふ福の推案よ 歌人の田舎のた
が山うさうさうたんぬらう年の歌うさうひじし
又福のの名あかりや白鳥さうまれゆれそ人の白鳥
の白鳥歌うさうものうやねわわ

○水鏡の奉国月十古中の白福の上巻に中尾海三節能経か
おあゆしし書字さの使奉月日 季歳に同く春は白鳥伝云
二妻と根福因娘とを是秘説と云能経説二妻と根福因相致
た所の同く二妻と云普通の説は守りて能経説より書字鳥尊と云
秘説は守り書字鳥尊に福田娘と
は中尾海福稱仲頼家能

○近松執事美山秋系因

△藤原通実

左衛門 藤原通実 美山玉山縣那佐呼地
左衛門村 松敷園白鳥と生通は政号近松と

家高

近松左衛門

道鳳

母去政判官園村女
美山一山附法

陽石

○ 藤瀬系図

△ 良基

園白左大臣
号俊善光園院

桑 師良

園白左大臣

師嗣

園白左大臣

二系正統

經嗣

園白左大臣

一系經道養子

兼良

攝政大臣

一系正統

教房

云依 一系園白左大臣
十二年於三河覺年十八

應仁二年下土呂文明

冬良

園白左大臣

一系正統 為教房養子

如子

濃洲森友新四所利国妻

若表

濃洲又市
三河是師濃洲村

此圖之代元中絶

正頼

友方

正義

友方

是より代々正統

松平三河守春親立成平基の際成瀬瀬酒井村之久保三時
等の教房成功より正統

慶應

塩尻巻第六終

000555



